

太陽の季節

石原慎太郎

太陽の季節

石原慎太郎

新潮社

太陽の季節

昭和31年3月15日 発行
昭和31年3月20日 2刷

著 者 石 原 愼 太 郎

發行者 佐 藤 亮 一

東 京 都 新 宿 區 矢 來 町 71

發 行 所 株式會社 新 潮 社

東 京 都 新 宿 區 矢 來 町 71

電 話 東 京 34 局 7 1 1 1—8

振 替 東 京 8 0 8 番

定價 250圓 地方 260圓
賣價

印刷者 塚 田 重

東 京 都 千 代 田 區 神 田 神 保 町 3ノ23

印刷所 塚 田 印 刷 株 式 會 社

製 本 加 藤 製 本 所

亂丁・落丁本は本社又はお買求めの書店でお取替えいたします。

Printed in Japan

目次

灰色の教室	五
太陽の季節	七
冷たい顔	一三
奪われぬもの	一五
處刑の部屋	二九
あとがき	七四

太陽の季節

亡き父と、
母へ、

灰色の教室

この年頃にあつては、欲望が彼等のモラルなのだ。

自己の中に深く入り込んで行くには、彼等にとつて不可能な秩序が必要だつたのだ。人々はこれらの悲劇的な、落ちつきのない魂の呼吸しているこの旋風に依つて醸し出される速力の爲に悩まされるのだ。それは、ほんの子供らしいことから出發する。そして人々は始めた遊戯をしかそこに見かけないのである。

コクトオ「怖るべき子供たち」

K學園のハイスクールは、T河邊りのなだらかな丘の上にあつた。驛の陸橋を渡つて改札口から眞直ぐ校舎に至るペイヴメントの兩側には、繪葉書でよく見る外國あちらの何處かの風景を、何とはなし想い起させるような、心持よい並木がつゞいている。

しかし、丘の上に建てられた校舎は、コンクリートの地肌をむき出しにしたまことに無愛想なものであつた。

ハイスクールの校長は、入學式など式典の折々、「なだらかなこの丘陵の上に連なる、これら我が

學園の偉容は、本學園をして世評の言う、その洗練さのシンボルであり、我校の偉大なる内容を語つて餘りある。」とは言つたが、戰時中にほどこされた、黒いダンダラのカモフラージュが、未だ塗りつぶされずにはげかゝつて残つているところは、確かにK學園の洗練されたる無感覺さであり、この矢鱈に大きなコンクリートの建物は、成り金の勝手口に見かける、馬鹿氣て大きなセメントの芥溜めの大きさであつた。

石井義久は、これと較べて彼の住んでいる湘南の避暑地の海岸寄りに、町の無けなしの豫算で新築された中學校の小つぽけなロッヂ建築の方が、よつぽど粹なもんだと思つた。彼は運動練習の歸りがけ電車の窓から、夕焼け空に女の肢體のように、丘陵の線がくつきり浮ぶ上に、巨大なタイプライターの活字のようなグロテスクな校舎が食いついたように乗つているのを見て、何時であつたか大磯の小高い山から日に輝いた湘南の平野を眺めた折に、その上を安手な朱と綠に塗りたくられた長い湘南電車が、何か毒々しい爬蟲類のように走つて行くのを見て感じたと同じような吐氣に近いものに襲われたことがある。

人々はK學園に最も都會風で先端的な學風をおしつけていたし、學生達もあえてそれに甘んじ、努めてそれを粧つた。

そのような世間と學園の間の既定したなれ合いの下でK學園は、この無愛想で遠くから眺めるとふと大仕掛けの火葬場を思わせる、とは言えそれ程までの崇嚴さもない厭味の建物を、洗練された都會的感覚のシンボルとしておしつけるあくどい無性振りを見せているのだ。

それ故に義久は、郊外にずつと離れてある同じ學園の理工科や農學部の大學生の内に、腰に手ぬ

ぐいをさげて下駄ばきの者を時たま見かけることがあると、妙に痛快なものを感じてその男に一瞬の友情に近いものまで感じるこゝが有つた。

木曜日の一・二時間目は選擇科目の授業時間である。生物を履修している義久は、卵を解剖して主要部分を圖示し、その主成分を分類せよと言う實驗課題を見て、この年になつて卵かと思ひながら配られた實驗材料の生卵を受けとつた。無愛想なセメント塗りの理科實驗室で手にした卵は、滑稽な程彼の掌に丸く感じられる。

K學園では授業料の他に月々四百五十圓かの金額が、實驗費と言う名目で徴收された。理論を好まぬ生徒たちを勉強と言う名の下で遊ばせるために、理科の教師は時間の度に子供じみた實驗を彼等にやらせた。先週は鰯が、先々週は蛙が、それぞれ各一匹ずつ生徒に渡された。これ等小動物は、生徒達が手を汚すまいとして握つたメスやピンセットの下で滅茶苦茶に切り裂かれほじくられ、擧句の果に捨てられた。

その後で彼等は、持つて來た參考書を丹念に寫してリポートを提出するのである。鰯の場合には、それを載せた參考書を誰も持ち合はなかつたので、鰯が適當に鰯に代えられはしたが、或る者の書いた鰯には鰯の持つ髭が丁寧に書き移されてあつた。

他の化學のクラスでは、簡単な消火器や花火など子供の玩具が作られた。消火器は通り掛りの教師の顔に水をかけたり、上着を後から知らぬ間に濡らす惡戯に充分役立てられ、化學の教師は方々から苦情を持ち込まれた。花火の方は、何處からか癩癩玉の製法を聞き込んだ生徒達によつて惡用され、教師が火藥の課題を變えるまで、休み時間には學校中で鳴らされ、教卓や椅子の下に敷かれ

て日頃怨みの教師に、見事仇を討つのに役立つた。

こう言う時、日頃ばらばらの級は妙にまとまり、この悪戯に憤慨した英會話の老英國婦人が、到頭日頃決して口に出さぬ日本語まで使つて犯人を詮議したが、生徒達は皆その日本語すら英語同様に聞き取れないと言うような顔をしてすまし通した。彼女は「貴方^{オウル}がたは皆紳士^{オプユアーノット}ではない」と捨臺詞を残して教室を出て行つたが、この小さな紳士達は憂鬱な英會話がпойコットされたことに歡聲を上げこれに答えた。これ以來教師達の間に、教壇の椅子は一度動かしてから坐る習慣がついた程である。

一通りの技術指導を行うと怠惰な若い生物教師は、「出来たものは教壇にリポートを提出して出てよろしい。」と言い残し自分は隣りの準備室へコーヒーを沸かしに入つてしまつた。

二時間目の終りまで、二度と教師の出で來ないのを知つてゐる賢明な生徒達の殆んどは、卵をそこなうことなしに本から繪を見つけて寫し直すと、實驗用の電熱器で湯を沸かし、茹で卵を作りにかかつた。他のある者は、卵の白味が帽子の表面を變質し革化するのに最適と言う危う氣な化學理論を本氣にして自分の帽子に卵を塗り込んだ。

こうして、實驗は數十の茹で卵の殻を残すと、一時間目の終らぬ内に全部終了して、生徒達は卵にそゝられて早くも現れた食欲を満たしに食堂へ出掛けたり、残された時間で麻雀を旨く終らせようと坂下の驛向うにある數多い麻雀屋の一つに驅けていつた。

義久は麻雀の古強者^{ベテラン}である。彼も麻雀に誘われた。誘つた相手はN級の松田と榎野である。残りの一人は義久と同級の河西であつた。河西につき合つた経験は義久にはない。何處の麻雀屋でも餘り見掛けぬ顔である。これがカモなんだと彼は思つた。松田と榎野は強^{した}かのベアである。義久はこの二人と卓を圍むのを好まなかつた。彼はこと麻雀に關しては非常に神經質なのだ。彼は麻雀で所謂小遣い稼ぎの出来るようになる前からこの遊びが好きであつた。數學嫌いの義久の頭をもつてしては恐らくわからずに終るであろう確率の理論が、この遊びに於ける彼の頭の、と言うより掌の内にあつては見事に具體化されていた。であるからこの二人のように埋牌をやり、人目をかすめて牌をとり變え、詰^詰られれば、終いには榎野のように拳闘部員の腕力を見せようかと言わんばかりに居直ることもやりかねぬ、又それを頼みに薄笑いを浮べながらインチキをやる松田のような二人組と、まして彼の好パートナーである關山を伴わずに、腕の知れぬ河西を混えてやることには氣が進まなかつた。

彼にとつてとてつもなく下手な男が一人加わつた麻雀ほど不愉快なものはなかつた。じりじりするような遊びの遅さに加え、彼が臆測し懸念しているものと正反對の牌を平然と捨てるので彼はすつかり自分のペースを壊され、たとえその男がそれによつてひどい負けかたをしても、義久は苦り切つた顔で終始だまつているだけであつた。

「どうしたんだ、やらねえか。」

そう言う松田の蔭で人の良い笑顔を見せている河西の顔を見て、義久は急にこの男が可哀想になり、出来ることならこの二人への面當てにも河西を沈めずに自分も勝つてやろうと言う氣が湧い

た。

「いくらでやるの。」

「ピン。」ピンとは賭け金が千點百圓の符牒である。

「手形ならいやだぜ。」

「勿論現金だ。」

「きつとだぞ、但し一莊イチヤシだけ、これは前からはつきり言つとくけど、俺は三時間目は必修の英語なんだからな。」

骰子サイが振られ義久の「下家シヤアンチヤが親となつた。これは彼の最も好きな順序である。彼は妙に自信が出來た。

一時間の後勝負は義久の勝ちであつた。彼は終始河西に氣を配りながら競技を行つた。河西は豫想通り腕は未熟でその手の内が簡単に讀み取られる。それを見ながら、義久は相手の二人のどちらか大きな手で上りを待つときは意識して安い手の河西に振り込んで相手を崩した。これが義久の出來る最低限のインチキであつた。

遊びの結果は義久がトップで六千點の勝ち、次の河西が千二百點の勝ち、樗野が三百點の負け、後は皆松田の負債であつた。

千圓をくずして二人に約束通りの金額を拂いながら、松田が、

「もう一莊やらねえか。」

「駄目だ、さつき言つたじやないか。俺は英語に出なきやならないんだ。」

「そんなものサボれよ、つき合いの悪い奴だな。」

しかし義久は黙つて立つと、

「俺は行くぞ、あと六分で二時間目が終りだ、誰か代りを捜しといてやるよ。」

彼は鋪道を上りながら一寸した勝利の嬉しさを感じた。それは段々幸福感に近いものとなつた。

俺はやれば出来るんだ。あんなことはたやすい仕事だ、そう思うと義久には、どうもわがりの悪い解Ⅱの數學がもう一度本氣でやつて見ればわけなく出来るもののように思われてならない。

丘へ上る途中で二時限の終りを告げるサイレンが鳴り渡つた。

サイレンの音は何時も人の氣持を妙にいらだたせる。サイレンが似つかわしいのは野球の試合の時くらいだ。時の経過を知らすのなら、どれ程鐘の音の方が良いか知れない。鐘の響きで送られて去つた時間は再びその音と共にゆつくり戻つて来るような氣がする。

義久はうつつくしい鐘の音に過した彼の幼稚園生活をふと思ひ出した。

教室に入つて自分の席に坐ると彼は妙な落着きを感じた。もつともそれは彼の得意な英語の時間だけかも知れぬ、數學のテストの時、時間がなくなつて來て、未だ一題も解答出來ぬ時など、彼はこんな坐りにくい椅子が有るものと立つて蹴とばしたい氣持になるのだ。

扉が開けられ英語の教師が入つて來て、一人々々顔をのぞきながら順番に出席を取り出すと生徒

達は少し静かになった。この教師にはどうしてか代返と言う手は絶対に効かなかった。その代り出席さえすれば無條件でパスさせると言う噂で、生徒達はこの時間だけは出来る限り出席していたが、出席を取られた後の退屈な授業の間は皆てんでに自分の好きなことをやつていた。ある者にとつては晝食の時間となり、ある者は小説を読み鉛筆で五目並べをやり、手紙を書いた。この時間を食堂から持つて来た週刊の寫眞雜誌やシネマ雜誌に當てる者も多かつた。こう言う場所で讀まれた外國の映畫俳優のスクヤンダルとか、女の子の流行の名稱は非常に良く頭にしまい込まれ屢々彼等の會話の内容を豊富にして餘りある。

教師は出席を取り終つて満足氣に言つた、

「すると、缺席は宮下君一人だね。今日は馬鹿に出席が良いな。」

比較的出席率の良いこの時間にしても、勉強に對してはおよそ意欲的な生徒の少いK學園にしては驚くべき成績である。義久は今日に限つて教室が馬鹿に混んでゐるような氣がした譯がわかつた。

暫くの間教師が自分一人で講義を進めた後に、

「では、少し皆にやつてもらふかな、當てられた者は讀んで譯す。」

生徒達はざわざわと餘計なものをしまひ込み、あわててページを合わせ、行を探し固唾を呑んだ。

「三原君、やつて。」

指された生徒は立ち上つて本を取り上げた。見るとその手が、突然電流を感じたように肩からが